

フリガナ	イトウ ヒロヒト
氏 名	伊藤 裕偉
学 位	博 士 (文学)
学 位 記 番 号	新大博 (文) 第 6 号
学位授与の日付	平成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
博 士 論 文 名	中世の伊勢湾岸に形成された湊津および地域の構造に関する研究

論文審査委員	主 査 教授 矢田 俊文
	副 査 教授 小林 昌二
	副 査 教授 荻 美津夫
	副 査 超域研究機構 教授 白石 典之

博士論文の要旨

本論文は中世に形成された人々の生活の場と、それを取りまく地域社会の諸関係解明をめざしたものであり、その具体的な検討対象は伊勢湾沿岸地域である。

対象とする時期は、主に平安末期から織豊期にかけての時期であり、その中でも室町・戦国期に関する検討が中心である。分析に使用する資料は、文献史料、考古資料が中心である。

序章では、本論文の目的と視角を明らかにし、研究史をまとめたものである。

その中で、重層的に絡み合う諸関係の複合体として地域を把握するためには、「下からの積み上げ」による地域研究の手法が模索されなければならないと述べる。

第 1 部は、安濃津をはじめとした湊津の場に関する検討を行ったものである。

第 1 章は、安濃津の機能の把握をめざしたもので、安濃津は政治的・宗教的要地であり、陸上交通路の結節点としても重要な位置にあり、京都との強い結びつきを有しながらも、伊勢湾沿岸部では神宮との強い関係を有していることを明らかにしている。

第 2 章は、発掘調査資料から安濃津の機能を検討したもので、土器の分析から安濃津が物資集散機能を有することを明らかにしている。

第 3 章は、中世における矢野の持つ意義について検討したもので、安濃津との強い関係を有しながらも、宗教・物流の関係で独自のあり方をしていたことを明らかにしている。

第 4 章は、伊勢国一志郡の海岸平野部にある醍醐寺領曾祢荘を検討したもので、荘園の機能のひとつとして湊津があり、全体として有機的にまとまりを持っていたとする。

第5章は、中世に湊津機能を有した伊勢湾沿岸部の個々の湊津を検討したもので、河口部付近形成された砂堆・潟湖を中心とした地形環境の共通性があること、河川単位でまとまった地域の形成されていることを明らかにしている。

第2部は、「屋号」を資料として活用することで、伊勢湾沿岸部の地域構造の検討を行ったものである。

第6章は、伊勢・志摩における屋号を素材として在所や地域の諸関係を検討している。15世紀から16世紀前半にかけての時期に、山田は物資集散と大消費地としての機能を兼ね備えた「都市」として存在しているが、同時期の大湊は製塩業が中心で湊津として際だった特徴は現れていない。それが16世紀後半になると、大湊は伊勢湾沿岸の各地から人が集まる物資集散地として具現化する一方、山田は商品生産と販売がより発達し、巨大な都市へと発展していったことを明らかにしている。

第7章は、第6章で抽出した屋号商人のなかから、代表的あるいは特徴的と思われるいくつかの事例について、その動向を追い具体的な活動を検討したもので、彼らが14世紀以来の伝統を持つ可能性があること、その名乗り・名跡は15世紀末頃には確立して近世へと継続すること、複数在所へと関わることによってより広範囲なネットワークを形成していることなどを明らかにしている。

第8章は、大湊と山田の位相を検討したもので、宮川河口地域の経済的な中核はあくまでも山田であり大湊ではないこと、また、単に「山田か大湊か」といった問題の立て方をすべきではないと述べる。

第9章は、神宮（山田）を介した経済的影響範囲を見るために南伊勢系土師器の分布に関する考古学的な検討を行ったもので、神宮（山田）の影響力は、伊勢湾沿岸部に限定されるものではなく関東沿岸部までを含めた極めて広いエリアであることを明らかにしている。

第6～9章の検討により、伊勢湾沿岸部のなかで神宮膝下の山田が最大の中心地であったこと、その構造には時期的変遷があり16世紀前半までは山田が中心地であったが、16世紀後半になると物資集散機能が大湊で発達し、山田は消費地・巡礼「都市」としてのめざましい発達を遂げることを明らかにしている。

第10章は、桑名の特徴を検討したもので、木曾三川の河口部にあること、近江を経由して北陸方面と独自の経済関係を有すること、山田・大湊を中心とした伊勢湾沿岸地域の一角を形成する特徴をも有するという特徴があることを指摘している。

終章は、伊勢湾沿岸部の地域構造とその形成単位、および日本列島における位置づけをおこなったもので、伊勢湾近隣の経済的地域区分を、京都を中心とした「京都経済圏」、桑名を核とした「木曾三川経済圏」、山田・大湊を核とした「山田経済圏」に区分できること、伊勢湾沿岸部は、この3区域が重なりつつも、総体として「山田経済圏」が主導するとまとめている。

審査結果の要旨

本論文は、平安末期から織豊期までの伊勢湾沿岸地域を検討対象として、地域社会の諸関係解明をめざしたものである。

本論文で評価できる主な点は、次の点である。

まず評価すべき点は、従来の研究では港町としてのみ考えられていた安濃津が、政治的・宗教的要地であり、陸上交通路の結節点としても重要な位置にあり、さらに京都との強い結びつきを有しながらも、伊勢湾沿岸部では神宮との強い関係を有していることを明らかにしたことである。

また、従来、伊勢の中心を大湊と考えてきた研究に対し、伊勢湾沿岸部の中心地は山田であり、16世紀前半までは山田が中心地であったが、16世紀後半になると大湊は物資集散地として発達し、山田は消費地・巡礼都市として発達することを明らかにしたことである。

さらに、伊勢湾地域は京都を中心とした「京都経済圏」、桑名を核とした「木曾三川経済圏」、山田・大湊を核とした「山田経済圏」に区分でき、この3区域が重なりつつも、総体として「山田経済圏」が主導するという地域像を提出したことである。

本論文のような構造的な地域史研究は、従来、京都・鎌倉を中心にして歴史を描いてきた日本中世史研究に大きな修正を迫るものとして評価できる。

本審査委員会はこれらの評価にもとづいて、本論文が博士号の請求論文として十分な内容を有していることを認定した。

また、本論文はきわめて歴史学としての専門性の強いものであることから考えて、伊藤裕偉氏に博士（文学）を授与することが妥当であると一致して判断した。